《公開講演会記録》

辛亥革命百年
――革命をプロデュースした日本人

小坂　文乃（梅屋庄吉曾孫）

小坂文乃（あやの）と申します。曾祖父、梅屋庄吉のお話をさせていただきます。梅屋庄吉と孫文先生の関係は、日中近代史の底に埋もれてしまった歴史ですが、昨今、隣国中国といかに向き合っていくかを考えていく中で、日本と中国はお互い助け合った歴史があるという事実に光が当てられてきているのではないかと思います。

本年、２０１１年は孫文先生が中心となって起こした辛亥革命から１００年を迎える記念すべき年です。孫文先生は中国では「革命の父」、台湾では「国父」とされている人物ですので、記念事業をどうするか、中国、台湾共に、政府の姿勢に前向きなものを感じています。

10月10日が革命の記念日です。残念ながら、中国と台湾が合同で式典を行うことはないのですが、それぞれに記念の祝賀があると聞いています。

中国では、昨年、毛沢東先生と向かい合う形で、孫文先生の肖像画が天安門広場に掲げられました。孫文先生の評価はだんだん上がっていると思いますし、中国のどの都市に行っても、中山公園とか、中山路とか、孫文先生にちなんだ場所というのはたくさんあり、国民的に愛されていらっしゃる人物です。

２００８年に、胡錦濤国家主席が10年ぶりに来日しました。そして最初の訪問地が「日比谷　松本楼」でした。なぜこんな小さいレストランに？と疑問を持たれた方も多かったと思いますが、ただ食事をしにいらしたのではなく、孫文先生と梅屋庄吉の歴史の資料が私の手元に残されていて、それを両首脳（当時、福田康夫首相）がご覧になるという、この一幕から訪日プログラムがスタートしました。

その当時の日本のマスコミは、胡錦濤先生はどんな食事を召しあがったのか？とか、どんなワインを飲まれたのか？ということばかりに終始していまして、私が一生懸命、テレビカメラに向かって、「大事な歴史がありまして……」と説明していたのが、全部カットされてしまいました（笑）。

去年、尖閣諸島問題などがありましたが、今年新年の外交演説で、菅直人総理（当時）が、この話を取り上げていました。読み上げますと「両国（日本と中国）の間には一時不幸な時期がありましたが、長い歴史の中では、政治、経済、文化といった広い分野で活発な交流が行われてまいりました。特に今年は、中国の近代化を始める曙となった辛亥革命から百周年を迎える記念すべき年です。この革命では、現在の中国の国父ともいえる孫文氏をはじめとする、日本にも縁の深い人たちがたいへん重要な役割を果たされました。梅屋庄吉という日本人が、この孫文氏を助け、親友として長く献身的に尽くしたという関係も、我が国だけでなく中国においても、認められていただいているところであります」と言っています。梅屋庄吉という名前が、やっと日本でも見られるようになってきたということです。

梅屋庄吉とは

孫文先生の辛亥革命にどのように日本人が関わったのか、その中でも、「真朋友」と呼ばれる梅屋庄吉はどのような人物であったのかをお話します。

松本楼は、梅屋庄吉がつくったレストランではありません。梅屋庄吉は私の母方のひいおじいさんです。父方の小坂家が、代々松本楼を経営しています。当時、日本にレストランは少なかったので、梅屋庄吉は孫文先生をお連れして、松本楼をよく利用していました。梅屋庄吉と孫文先生は松本楼のいいお客さまでした。三代目、孫の代になりまして、たまたまお見合いの話がきて、私の父と母が結婚し、私が生まれました。なので、私は松本楼の仕事もしながら、梅屋庄吉の話もするということです。

孫文先生は革命に携わった30年という長い年月の間の３分の１にあたる10年近くを日本で過ごされています。ずっと10年間日本にいたというわけではなく、たびたび亡命してきたり、正式に鉄道大臣という立場で、日本を訪問されたり、様々な形なんですが、合計すると９年６カ月、およそ10年近くになります。その長い年月の中で、本当に多くの日本人が関わっています。知られているところをあげていくだけでも３００人はいるのではないかと。ある研究者のお話ですと、風邪を引いてお薬をもらったお医者さんまで数えると、だいたい１５００人くらいは孫文先生と関わりがあったようです。最初に申し上げた３００人をグルーピングすると、３つぐらいに分けられるといわれます。

まず自由民権主義の立場の人たちです。中国革命に実際参加した大陸浪人と呼ばれるような人、宮崎滔天、萱野長知などです。次に、国権主義の立場から孫文先生の革命を応援したグループ。頭山満、内田良平など。

第三は、有力者グループです。政界、財界、犬養毅、桂太郎、久原房之助、安川敬一郎、こういった方たちが孫文先生をお助けしました。梅屋庄吉もこの第三のグループに入ります。

ですが、この人たちは本当に孫文先生の友達だったかというと、「真朋友」、本当の親友はごくわずかの人たちだったと言われます。それぞれ自分の目的を遂げるために孫文先生の革命を利用していた日本人がほとんどだったと。中国では「假朋友」（注・ニセの友達）とこの方たちのことを言っているそうです。たとえば、久原房之助さんは東京・白金に八芳園というお屋敷が残っていますが、久原さんと孫文先生との間で財政的に支援をする時に、このような約束事を交わしていました。「今後もし借款人（注・久原氏）が中国における事業の計画について

署名人（注・孫文先生）に相談する場合があれば、署名人は必ず好意的協力をあたえるべし」、つまり交換条件だったわけですね。そのような日本人の中で、なぜ梅屋庄吉に胡錦濤国家主席が関心をもたれたかというと、梅屋庄吉はまったく見返りを求めていないという点で本当の友であったから、といえると思います。

生い立ち

梅屋庄吉は、１８６８年、長崎の貿易商の息子として生まれました。10歳の時、洋靴をはいて、洋傘を持って、エキゾチックな柄の帽子をかぶっている写真が残っています。梅屋庄吉の生まれた家の近くに写真スタジオがあり、梅屋も小さいころから写真に親しんで、後に写真ビジネスをやり、映画のビジネスをやり……ということになっていくわけです。

梅屋庄吉は少年のころは暴れん坊で、いろいろな武勇伝を長崎に残しておりますが、困っている人をみたら、放っておけないという性格でした。自分の家はある程度裕福な家だったのですが、ちょっと離れたところに貧しい地域があり、貧富の差があることに疑問をもつ少年でした。自分の家のお金を持ちだして、貧しい人たちに配ったりしていたようです。その貧しい地域のある老人が、「自分は身寄りがないので、梅屋の坊ちゃん、自分が死んだら石碑のひとつでも建ててくださいな」と庄吉少年に頼んだそうです。そのせいか、この後、庄吉は、たくさんの無縁の、身寄りのない方のお墓を建てていきます。香港とか、青山墓地とかに、あるいは晩年を過ごした千葉の別荘の近くに、梅屋と関係のない方のお墓を建て、それが残っています。

10歳の梅屋庄吉

その当時の長崎から見れば、東京よりも上海のほうが近いので、その頃の長崎には「東京へは水杯で、上海には下駄ばきで」という言葉があったそうです。自分の家は貿易商をやっていたので、中国の方と触れ合う機会は多かったと思います。

庄吉少年はあこがれの地、中国に行ってみたいということで、14歳の時に、自分の家の持ち船に乗って上海に行きました。そのあこがれの中国で、庄吉少年が目にしたものは、当時の西洋列強に植民地化されつつある中国の姿でした。人としての尊厳を与えられないようなひどい状況を目の当たりにしました。

庄吉よりも20年も早く上海に渡った高杉晋作も「実に上海の地は、支那に属するといえども、英仏の属地というも可なり」という言葉を残しています。中国の人々が人間としての尊厳を与えられないようなひどい扱いを受けていることに憤りを感じたこと、これがその後、新しいアジアをつくりたいということになっていく大本になったわけです。

庄吉は本当に広くアジアに足跡を残しております。飛行機がない時代にどうやってと思うくらい、シンガポール、フィリピン、中国各地を訪れています。フイリピンでも革命を志す人たちとつき

合いがありました。いったん長崎に帰るものの、落ち着いて自分の家の商売をするような性格ではありませんでした。南洋開発をやるんだと意気込んだり、写真ビジネスをやったり、若い時は放浪人生を過ごします。その頃に培った人脈、あるいは語学の能力が後にすごく役に立ちます。孫文先生をかくまったり、あるいは革命軍に武器を送ったりという際に。

今でこそ孫文先生は歴史上の偉人ですが、当時は清朝政府に懸賞金をかけられているおたずねものですから、そういう人物をかくまうのは、当然裏ルートが必要なわけです。

孫文先生もまた13歳の若さで、故郷の広東省中山県（注・現中山市）から離れてハワイに行きました。お兄さんがハワイで事業に成功していて、そのお兄さんを頼ってハワイへ行ったのです。つまり孫文先生も10代の若い時に生まれた土地を離れて、外から自分の生まれた国、あるいはアジアを見るという経験をしているわけです。ですから、この二人が意気投合するのに時間がかからなかったというのは、同じように10代の時から、いろいろ見たり、考えてきたという背景があったからではないかと思います。

そして後に大アジア主義という考え方が出てきますが、孫文、梅屋とも、アジアにはマレー系の人とか、インド系、中華系、いろんな民族の人がいることを肌身で感じて分かっているので、孫文先生と梅屋の考える新しいアジアの秩序とは、広くアジアの諸民族と共に生きる、共生するという世界をつくりたいと思っていたわけです。

ところが後に日本でアジア主義といわれる方々は、日本が明治維新を成功させて、日本が一歩アジアの中でリードしていたわけですから、日本を盟主としてアジアの新秩序をつくるのだという考え方です。つまり同じアジア主義といっても、ちょっと根本が違うということを頭の中に入れておいていただきたいと思います。孫文先生も梅屋も軍事でアジアをまとめていくのではなく、文化とか経済などで、今そういう世の中にはなっていますが、そういうことで新しいアジアの秩序をつくっていきたいと思っていたようです。

梅屋庄吉の夫人トクは、長崎県壱岐の出身です。武家の家に生まれましたが、明治維新以後、だんだん生きるのに難しくなりまして、長崎市の裕福だった梅屋の養女に入りました。しっかりしたトクさんでしたので、ふらふらと放浪している庄吉にはこうしたしっかりした娘がついていてくれたらいいという親の願いを聞いて2人は結婚します。トクさんは後にとても大きな仕事をしますが、それはまた後でお話します。

写真館での出会い

孫文先生と梅屋がどのようにして出会ったのかをお話します。１８９５年、当時梅屋は香港で写真館を開いて成功していました。当時の写真館は、お客が来るのを待ってポートレートを撮るというのが一般的だったようですが、梅屋は商才があったようで、自ら結婚式などに出向いて撮影をする、いわば出張撮影の方式を取り入れて、香港での梅屋庄吉写真館は繁盛していました。そこによく一人のイギリス人が出入りしていました。

ジェームス・カントリーという人でカメラいじりが趣味だったようですから、おそらくカメラをいじりながら、梅屋といろいろな話をしていたことと思います。梅屋は「このアジアをどうにかしたい」と彼によく言っていたのでしょう。ジェームス・カントリーさんは、孫文先生の医学校時代の恩師で、革命を起こす前は医者だった先生は「治したいのはこの国である」というようなことを、恩師

に打ち明けていたようです。カントリーさんは、「自分がよく行く写真館の主人と教え子は同じようなことを言う、この二人を出会わせたら何かできるのではないか」と、思われたのだと思います。カントリーさんは孫文先生を連れて写真館に来ました。これが二人の出会いです。

孫文先生も梅屋も10代からアジアの行く末についてはいろいろな思いを持っていましたから、話をすると、「肝胆相照らす」という言葉があるように、同じような考えをもっている友に出会えたと思ったようです。この出会った時のことを、梅屋は、晩年次のように表現しています。

「中日の親善、東洋の興隆、はたまた人類の平等に就いて全く所見を同じうし、殊に之が実現の道程として、まず大中華の革命を遂行せんとする孫文先生の雄図と熱誠は、甚だしく我が壮心を感激せしめ、一午の諠（よしみ）遂に固く将来を契ふに至る」と書き残しています。

「孫文先生、あなたは兵をあげなさい、革命をおやりなさい。私は財をもって支援す、私はあなたにお金で支援します」という約束を交わすわけです。梅屋庄吉はこの約束を一生涯守ります。出合った時、孫文先生29歳、庄吉27歳でした。

さて、「我は財をもって支援す」と約束した以上、財をつくらなければなりませんでした。写真館で儲かっていたお金も孫文先生にすぐにお渡しします。それを中心に、孫文先生は最初の革命、広州での革命、広州起義を企てるわけです。広州起義から辛亥革命まで、何と11回も革命を起こしては失敗しまた起こして失敗を繰り返していくわけです。広州での革命が失敗した時に、孫文先生には清朝政府から逮捕状が出ましたが、その財政的支援をしていた梅屋庄吉にも逮捕状が出ます。庄吉は香港の写真館の財産をそのままおいたまま、シンガポールに逃げました。

そのシンガポールで出合ったのが映画でした。当時の映画ですから、10分あるかないかくらいのフィルムであったと思いますが、写真だけでも驚くのに、フィルムをまわすと人だかりができる、これはビジネスにできるのではないかと、フィルムをたくさん買い込んで映画ビジネスを始めました。あちらこちらで興行して、フィルムを回しお金を集める、ということをシンガポールでします。

そして日本に凱旋帰国して、東京大久保の百人町に、撮影所もかねた１５００坪の邸宅をかまえます。梅屋邸はすごい門構えで、当時としては立派な調度品を備え、２階には後に孫文先生と宋慶齢先生の結婚披露宴が行われた広間があります。庄吉は映画事業を成功させましたが、稼いだお金は革命につぎ込んでしまいましたので、私ども子孫には柱の１本も残っておりません（笑）。

梅屋はどんな映画をつくってビジネスを成功させたのでしょう。みなさまもご存じの白瀬矗（のぶ）の南極探検。この白瀬矗南

梅屋邸の門構え

極探検に日本政府はお金を出しませんでした。早稲田大学をつくった大隈重信が理事長となって寄付金を集めました。梅屋庄吉は11万円5千円を後援会に寄付しました。当時の11万5千円ですからすごいお金です。

そして、どうせなら南極に撮影隊を同行させようということになりました。当時の南極は、今の私たちが火星に行こうと思うくらいのとんでもないことだったと思います。そこで撮られたフィルムが、「ペンギンたる生き物がいる」とか、当時はペンギンはすごい気持ちの悪い生き物だったらしく、宇宙人みたいなあんなのがいるとか、大きな氷の塊が動くとか、流氷の様子が出てくるとか、見たこともない映像がどんどん出てくるので、空前の大ヒット作になります。このフィルムは、近代フィルムセンター、早稲田大学、白瀬矗記念館に、最初のドキュメンタリー映画として、保管されています。

またエンターテインメントだけではなく、そのころはテレビのない時代でしたから、教育にも役立てることができるのではないかと、大量に外国から、博物学、生物学、軍事、衛生など、いろいろなフィルムを買い込んで、無料で貸し出しました。映画は見てすぐ分かりますので、そのことを利用して、いろいろな学術的な映画を無料で必要な所で上映したという記録が残っています。山形県でコレラが流行ったんですが、その時に、梅屋庄吉は「衛生」というフィルムを持って山形に行きました。そのフィルムは井戸水は煮沸しなくてはいけないとか、手を必ず洗わなくてはいけないとか、教えるわけですね。そうするとその村の一般の人は、井戸水は煮沸して飲むんだとか、そういったことを知って、コレラの蔓延を防ぐことができたと、いうようなことも伝えられています。

エンターテインメントもつくるけれども、社会的な映画をつくることも梅屋は目指しておりました。当時、横田商会とか、吉沢商店とか、福宝堂とか、ライバルの会社があり、梅屋はこの4つを合併し、日活撮影所を創設させました。

辛亥革命！

孫文先生が日本にいらした時は、松本楼で孫文先生を囲む会のようなことをやっていました。これが革命の志士が寄せ書きした衝立というのが、私の家に残っております。実は孫文先生は清朝政府に追われる身ですから、中国国内ではほとんど活動ができなかったんですね。ですから、日本にいたり、アメリカにいたり、ヨーロッパに行ったりして、理想を語り、お金を集めていました。実際に

革命の志士たちが集った「日華同志懇談会」

辛亥革命をやったのはこの人たちです。陳其美、居正、戴李陶、いろいろな名前があります。みんな梅屋の家に来て、自分の思いとともにサインをした衝立です。

孫文先生は、辛亥革命の１９１１年10月はアメリカのデンバーにいました。中心的な役割をしたのは黄興という人ですが、梅屋はこの革命が成功しそうだと聞いて、それは孫文先生の長年の夢の成功ですから、どんな形で成功するのか、孫文先生にお見せしたいと思ったのでしょう、自分の撮影隊を、湖北省武漢に送りこんで、辛亥革命の様子をフィルムに収めています。同時にスチール写真も撮りましたから、私の手元には、この辛亥革命の写真が残っています。梅屋はそのフィルムを興行には使いませんでした。孫文先生のためだけに映画館を貸し切って、上映したと聞いています。そしてフィルムは孫文先生に渡したのだと思います。このフィルムは周り回って今、北京のＣＣＴＶのアーカイブスに保存されています。そのフィルムと私の手元にある写真がまったく合致します。ですからその辛亥革命を撮ったフィルムは、梅屋が撮ったものだと証明されています。

孫文先生と梅屋のやりとりは電報でした。何通か電報が残っています。革命ですから武器が必要だったのですが、革命軍の武器輸入委員委任状とかですね、そして小銃７千挺、機関銃７門とか、大砲５門とか、実際の注文書も残されています。こうしたリクエストに答えて革命軍に武器を送っていました。

孫文先生は日本政府にも革命軍の応援を要請されていました。日本政府の当時の立場としては、日本の国益から孫文先生についたらいいのか、清朝についたらいいのかと、どっちつかずでした。また日英同盟というのがあり、その英国は清朝がいてくれたほうが、自分たちのやりたいことがやれるということもあって、どちらかというと革命軍を支援する立場ではありませんでした。日本政府は孫文先生に頼まれれば武器は送るものの、それは日清戦争で使い古した武器で、使い物になるのはなかなかなかった。ところが梅屋庄吉が裏ルートから、送った武器は非常にありがたかったというお礼状なども残っています。

辛亥革命後、孫文先生は臨時大総統の座につくわけですが、すぐに袁世凱にその座を譲ることになります。袁世凱はだんだん孫文先生の理想とは違う国づくりを目指すようになったので、今度は袁世凱を倒すための第二革命、第三革命に突入していくわけです。

宋家三姉妹

ここからロマンチックな話をさせていただきます。日本では今、三姉妹のドラマが放送されていますが、中国にも有名な三姉妹がいました。宋家の三姉妹です。「一人は財を愛し、一人は国を愛し、一人は権力を愛した」と言われている三姉妹です。長女、宋靄齢さんは、孔子の子孫で中国一金持ちの銀行家といわれた孔祥熙さんと結婚、次女の宋慶齢さんは孫文先生の妻になりました。妹の宋美齢さんは蒋介石夫人です。中国の歴史に深く深くかかわった三姉妹です。

宋家の三姉妹は若い時からアメリカに行って、アメリカの大学を出られました。宋慶齢さんがアメリカの大学を出ら

宋慶齢

れた時に、お父さんの宋嘉樹、チャーリー・スン（宋）さんは、孫文先生の熱烈な支持者でした。孫文先生が日本に亡命する時はいっしょに亡命されました。それで宋慶齢さんはアメリカから上海に帰るのではなく、お父様がいらっしゃる東京に来ました。そして孫文先生の英語の秘書となられました。宋慶齢さんは外国でモダンな、最先端の教育を受けた中国の女性ですから、ピアノを弾いたりとかも大好きで、当時日本にはそんなにピアノがなかったのですが、梅屋の家にはピアノがありまして、これはヤマハの前身の日本楽器の国産の最も古いピアノで、この時代に造られたものは今では２台しか残っていないそうです。戦争で焼けちゃったりしたのでしょうね。なのでヤマハさんからもとにかく大事にしてくださいと言われています。この現物は松本楼のロビーに置いてありますので、もしよろしければ見に来てください。このピアノを弾くために、宋慶齢さんはたびたび梅屋の家に遊びにきていました。

１９１５年当時、第二革命を失敗した孫文先生が失意のまま亡命していた時です。革命もうまくいかない、お金もない、またこの時、革命の同志も勢力が分かれていて、仲間も離れていった非常に苦しい時期でした。苦しい時期に、若くて美しい英語の女性の秘書がそばにいるわけです。どうなっちゃうかといいますと、宋慶齢さんの美しさ、やさしさに心惹かれていくわけですね。恋に落ちました。宋慶齢さんも子どものころから尊敬していた孫文先生のそばにいられるということで、尊敬の気持ちから、年頃ですから恋という形になっていくわけです。

ところがこの二人の恋愛関係には周りが大反対でした。理由はいくつかあります。孫文先生には中国に妻と３人のお子さんがいました。二人はクリスチャンだったのですが、クリスチャンの仲間からもよろしくないと反対を受ける。革命の同志たちも、自分たちが上手くいっていない苦しい時期に、若い女性と恋仲に落ちるなんていかがなものかと、大反対されるわけです。宋姉妹のお父さんも、孫文の熱烈な支持者ではあるが、自分の大事な娘を嫁にやる相手ではないと猛反対をします。当時の中国では、第二夫人、第三夫人を設けるというのはままあった話ではありますが、宋慶齢さんはアメリカの大学を出た、ちゃんとした教育を受けられた方ですから、第二、第三夫人というわけにはいきません。宋慶齢を孫文と引き離すため、お父様は彼女を連れて上海に帰ってしまいます。

宋慶齢さんが上海に帰った後、孫文先生はどうなったか？　ごはんを食べなくなっちゃったのです。梅屋の家に行っていたのでしょう。トク夫人が「私の作ったものは気に入らないんですか？」と聞くと、「そうじゃない、ほっといてください」というわけですね。トク夫人は、孫文先生に元気で革命を成功してもらわなければいけないですから、トク夫人は励ますわけです。

孫文先生が沈んでおられるのを見て、トクは一歩踏み込み、「宋慶齢さんが上海に帰ったから元気ないんですか」と聞くと、孫文先生は「自分は宋慶齢が忘れられない」と、胸の内をトク夫人に打ち明けました。トク夫人ははっきりモノを言う日本の女性でした。「親子ほど年が離れた人と結婚するのは早死にするからやめなさい」と孫文先生を諭すわけですが、孫文先生は、「宋慶齢と結婚できるのなら明日死んでも構わない」と、熱い胸の内をトク夫人に言います。トク夫人は、そこまで言うのなら何とかこの二人を結婚させよう、何か道はないかと考えて、孫文先生の手下だった、陳其美さんを上海に送って、その友達の娘さんに宋慶齢を連れ出させるというようなことをして、宋慶齢さ

んを連れてきます。

その間、孫文先生は前の妻、盧慕貞さんと離婚します。盧慕貞さんとは19歳の時に結婚したのですが、世界をずっとあちこち回っていて、はっきりいってずっと別居状態だったわけです。盧慕貞さんは典型的な中国の古いタイプの女性で、纏足をしていたりで、孫文先生と自由に出歩くことはできなかったんです。しかも、自分は孫文先生のやっていることは分からない、国を変えようとか、国を壊そうとか、していることもちょっと理解できないということもあって、この離婚はわりとスムーズだったようです。

そして晴れて孫文先生と宋慶齢先生は結婚します。東京で和田さんという弁護士を仲介として、結婚式を挙げ、披露宴は梅屋の家でしました。この結婚披露宴には、犬養毅さん、頭山満さん、宮崎滔天さん等、日本の支援者は全員集合したのですが、革命の同志たちは2人の結婚に反対していましたので、披露宴に出席したのは、陳其美さんだけでした。

梅屋庄吉夫妻の支援というのはお金だけではありませんでした。物心両面で、プライベートな部分にも関わっていましたし、孫文先生だけではありません。孫文先生の離婚後の秘書であった戴李陶という人、この人には中国に奥さんがいたのですが、日本で好きな女性ができてしまって、その人との間に子どもができてしまうんです。この子どもは後に蒋介石の養子になります、蒋緯国さんという有名な方ですが、うちには、戴李陶さんからの「ガールフレンドができ、子どもも生まれちゃったんでお小遣いをやってほしい」という手紙も残っております。蒋緯国さんが、日本の女性の子どもであるとか、ないとか、いろいろな説があったんですが、戴李陶を研究している学者さんは、この手紙を見て、本当だったと確認されています。当時革命に携わった人たちの物心両面をいろいろな形で支えていたということが分かります。

梅屋夫妻と孫文

梅屋庄吉が愛用していました羽織に、孫文先生が「賢母」と書いています。これは革命の父が孫文先生であるならば、梅屋庄吉夫妻というのは見えないところで、お金の工面をしたり、いろいろな生活の世話をしたり、とお母さん的な役割をしていたということを、そしてこの梅屋トクさんが、孫文先生、宋慶齢さんを結び付ける大きなお母さん的な役割をしたとして、この「賢母」と言う字を残されました。

梅屋は、支那共和国公認期成同盟会という組織を立ち上げて、早く日本政府に孫文先生がつくった中華民国を正式な政府として認めさせようと働きかけました。

日本には大陸浪人と呼ばれる人たちが大勢いて、その人たちが実際に中国に行って孫文先生の革命を応援したり、あるいは日本で孫文先生を守ったりしていたわけです。有名になった宮崎滔天は、『三十三年の夢』という書物を書き残したことで、長い間、宮崎滔天こそが、いろいろな面で支援をしたと言われていま

すが、宮崎滔天から梅屋にあてた手紙が残っています。これらの手紙はみな無心状です。ある手紙には「遠来の珍客あれども、酒どころか茶一杯も飲ませられぬ笑止さ。これではいかにも支那浪人の顔が立たぬ。さればたびたび願う、いくらかにてもお貸し…否、恵みてこの男の顔を立てさせ玉へかし」とあります。そして厚かましくて行きにくいから、「せがれ龍介をつかわしてこの義をふして願う」と書いてあります。

革命の志士は、お金が儲かるわけではないですよね。だからこうやって梅屋が家族の生活費を渡したり、あるいは中国に赴くための資金を出したりしていたわけです。梅屋庄吉の日記には、孫文先生ほかいろいろな人の名前が出てきます。宮崎滔天の名前には「宮崎滔天金高沢山不明」と書いてあります。数え切れないほど資金援助をしてるとか、金を貸しているとかということが日記に記されています。

さっきフィリピンの革命のみなさんとも親交があった話をしましたが、インドの革命のみなさんとも交流があり、たぶんお金も渡していたんだと思います。有名なのはラス・ビハリ・ボースです。松本楼のカレーも有名ですが、たぶん東京で一番有名なのは新宿中村屋のカレーだと思います。新宿中村屋にカレーを伝えたといわれるボースを新宿中村屋に連れていった中心人物が頭山満さんです。

孫文の死

結婚９年目、１９２５年に孫文先生が亡くなります。孫文先生は晩年、中国と日本の関係が悪化していることを非常に心配され、南の広州から北京に向う途中、体調がよくないのにわざわざ神戸に立ち寄られて、有名な大アジア主義の演説をしました。その時に残された有名な言葉が、「日本は東洋の王道の干城となるのか、西洋の覇道の犬となるのか、考慮すべきである」というものです。梅屋庄吉は体調を崩して、神戸の演説を聞きに行くことはできませんでした。孫文が日本を離れる時に梅屋庄吉にあてた電報が残っています。これが孫文先生からの最後のメッセージとなりました。それには「貴国滞在中のご厚意感謝す。今後も全アジア民族復興のため、ご協力を切望す。あわせてご健康を祈る」と書いてあります。４カ月後、孫文先生は北京で肝臓がんのためお亡くなりになりました。

梅屋庄吉夫妻は、宋慶齢さんを先生と結婚させたわけですが、孫文先生がお亡くなりになった後、前夫人の盧慕貞さんを、わざわざマカオまでお訪ねして、お慰めしています。

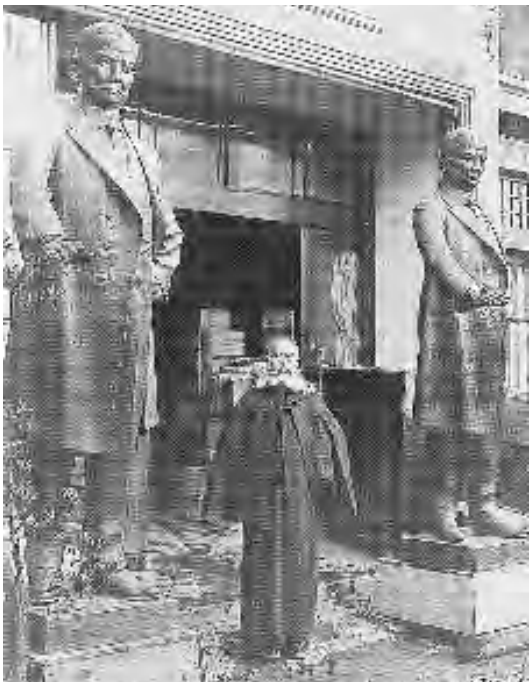
孫文先生を南京の中山陵におさめる時には、梅屋は日本人でただ一人棺をかつぎました。南京のお葬式の様子は、中国で動画として残されていまして、南京に行った時、見せていただいたんですが、各国の大使、公使、ＶＩＰが参列している中で、梅屋庄吉夫妻は頭山満先生と、犬養毅先生と３人で登場するわけですが、皆、儀礼的にきて礼をして下がるんですが、梅屋庄吉夫妻は、大きなハンカチで泣きながら登場して泣きながら去っていくんですね。梅屋庄吉夫妻だけです。他の人はさらっと通り過ぎていくのに。ですからその記録ビデオにも「梅屋庄吉夫妻号泣」とテロップがかぶります。本当に心からの友であったと、私もジーンとするんですが、本当に心の温かい夫妻だったことが見てとれます。

孫文先生が亡くなられた後、日本と中国の関係はより悪化していきます。ですから、孫文先生のまわりにいた日本人の中には、どちらかというと軍部に近いほうへ行く人もいました。が、梅屋は日本と中国は戦争をしてはいけないと、兄弟の国として仲よくしなくてはならないと

いう思いを貫きます。

まずは孫文先生の偉業を伝えるべく、銅像を４体つくります。晩年の梅屋はお金がほとんどなかったにもかかわらず、４体もつくって船に載せて持っていくわけです。その時の資金の一部は、娘（私の祖母ですが）の結婚費用にトク夫人が必死に貯めておいた箪笥貯金、株券とか、それを全部使って、４体もつくったのです。この４体はみな現存しています。１つは南京の中山陵、それから広東省の中山大学のキャンパスのど真ん中、そして孫文先生が国共合作のために開いた軍事の学校、黄埔軍官学校、さらにマカオの国父紀念館、４つすべて現存してます。この銅像は、後の文化大革命の時に、倒される危険性がありました。特に日本人がつくったというので。しかし、当時の周恩来首相がこれは絶対に倒してはいけないと命令を出し、これらの銅像は隠されたり移動したりしながら、難を逃れ、今でも現存しているわけです。

孫文先生の息子の孫科さんからの銅像のお礼状もあります。孫文先生が亡くなられた後、蒋介石さんとは家族ぐるみでのつきあいがありました。蒋介石さんが梅屋の家に遊びにいらした時の写真が残っております。梅屋が銅像の次に考えたのは、もともと映画人ですから、日本と中国の国民感情が悪くなっていく中で、映画を通して、孫文先生を中心に日本人と中国人がこんなに協力をしたいい関係だったのだということを、「大孫文」という映画をつくって、一般の人に知らしめようとしたことです。趣意書までつくり、蒋介石さんからこの映画をつくっていいよという、承認まで得たのです



梅屋庄吉と孫文像

が、時に満州事変などが起こって、この映画をつくることはできませんでした。未完の映画になり、梅屋庄吉は落胆したと聞いています。

日本と中国の懸け橋たらんとした梅屋庄吉の行動は、当時の軍部からすると、売国奴としてにらまれるようになります。２度ほど憲兵隊につかまっています。家にあった革命に関するものは、ほとんど憲兵隊に押収されてしまいました。私の手元に残っているのは、秘書がかき集めて隠してくれたものだけで、ほとんどのものは押収され、焼かれたと聞いています。

それでも負けずに梅屋は、外交ルートを通じて、戦争を回避しようとしました。当時、外務大臣だった広田弘毅さんに２度面会をして、何とか和平の道はないかと話をしておりました。広田外相から梅屋にあてた電報があります。「広田外相、明日夜８時、先生の意見希望す」と書いてあります。梅屋は３度目に、広田外相に会うために、晩年は千葉の別荘に住んでいたんですが、そこから東京に向かう駅頭で倒れて亡くなりました。65歳でした。

他界した時は、新聞もやさしくて、「支那革命の邦人の黒幕」とか、「惜しまれる

志士」とか、「革命の恩人」とかの見出しで報道されました。梅屋のお葬式には、日中関係が悪い中でしたが、蒋介石から花輪が届き、広田外相から真榊が届いたというように、日本と中国の懸け橋たらんとした生涯でした。

なぜ全財産をつぎ込んでも、革命や孫文先生の支援をしたのか疑問に思うところだと思います。もちろん孫文先生を尊敬したという気持ちもありましたが、梅屋庄吉には信条があったんですね。「富貴在心」という梅屋の書があります。人の価値は財産や持ち物で決まるものではない。人の価値は魂にある。人の世は持ちつ持たれつもろともに、助け合うこそ人の道なれ」とか、「この手によって、つくれる富は多しといえども、貴むにあらず。身を捨ててこそ浮かぶせもあれ」とか。このような言葉を繰り返し日記や書に書いています。憲兵隊に押収されていますので、とびとびにしか残ってませんが、こういう言葉とともに、細かい金銭のやりとりが載っています。誰にいくらあげたとか、薬がいくらだったとか、バターがいくらとか、そんな細かいこともありましたし、当時の革命の志士に、当時のお金で十何万やったとか。大きなお金の動きも記されています。

国交回復した後、宋慶齢さんは国家副主席でしたが、梅屋のお子さんが生きていたらどうしても会いたいと、梅屋の娘夫妻を北京に呼びました。この時に書かれた手紙が残っています。「当時のことを思い出しました。梅屋庄吉先生とご夫人、孫文先生と私の友情を思い出しました。この宝のような友情は、どんなに時間がたっても、どんな情勢になっても、けっして消し去ることはできない。「不能」（注・できない）というところを強調して波線がひいてあるんです。こういう手紙を残してくださっています。孫文先生は、あまり梅屋との関係を記録に残してらっしゃらないですし、革命のことですから、内緒のことはたくさんあったと思います。この宋慶齢さんが残した1通の手紙から、孫文先生夫妻、梅屋庄吉夫妻の間に宝のような友情があったのだということが分かります。

私はこの歴史を機会があると話したり、私の手元には古い資料がありますから、本にまとめてみたりということをしているわけですが、日本と中国の何かの懸け橋になるような活動をしています。昨年は、上海万博で、日本館が大人気だったんですが、5日間ほど、「孫文と梅屋庄吉展」を展示する機会をいただき、2万541人を5日間で動員しました。これはこのスペースにこれ以上入らないという人数でした。

それ以降も、北京、武漢で、シンポジウムをかねた展示会をしました。中山市は孫文先生が生まれた場所ですが、今年3月、中山市が主催して、「孫文と梅屋庄吉展」をやりました。中山のイベントの時は、上海の孫文紀念館と中山の孫文紀念館が初めてコラボレーションをしました。それまで両者が協力するようなことはなかったようですが、孫文・梅屋の展示会をやるために、初めてお互いに協力したのです。梅屋と孫文先生の生誕地、長崎と中山市が青年交流をしようと動いています。こういう交流をつなげていきたいと思っています。長い時間、お聞きくださってありがとうございました。

（7月14日　アジア研究懇話会）

講師略歴（こさか　あやの）

1968年東京都生まれ。中学・高校時代を英国で過ごす。立教大学社会学部観光学科卒業。

現在、松本楼常務取締役企画室長。日英協会会員。「孫文と梅屋庄吉研究センター」（上海）顧問。著書「革命をプロデュースした日本人」（講談社）